

古市公威

東條恒雄

誰だつたか、人間の型を三つにわけて、第一を政治家、
軍人などの統率者、指導者、組織者型、第二を技術者、科
學者などの直接的な生産の擔當者、第三を哲學者、教育者、
思想家の型とした。この小傳で扱つて來た人物は勿論この
第二型に入る人ばかりであり、技術者にして科學者を兼ね
てるる人とか、その逆の人とか云つて來た。しかし中には
この第二型に屬する人で、第一型的な仕事に入つてゆく人
も相當見出される。男爵、工學博士古市公威はさういふ種

はれてゐた)これは單純勞働の集積さへあれば成立し得
る。謂はば卓越した指導者さへあれば原始的な勞働で事足
りた。かくてピラミッドや、萬里の長城のやうな驚くべき
大工事が既に古代に於て遂行されたのである。土木技術に
於ける古代的、中世的なものと近代的なものとの間には、
他の諸技術に於て見るやうな、質的變化を隔らす程の量的
な、著大な變化は見られないのである。質的變化そのもの
も、他の技術に於けるほど顯著ではない。ただ數學や力學
の成立と共に、上に述べた經驗的な『直観』が徐々に、さ
ういふ科學的基礎を得、いよいよ確實なものとなり、精密



古市公威 男爵 (昭和三年七月十五歳)

類の一人であつた。

第二型の人が第一型的なものを兼ねるやうになるのはま
づその人の時代と個人的な性格、第二にその人の専門部門
の特質に依ると考へられる。ところで古市博士の専門は土
木工學である。そこで土木工學の特色を一應考へて見る。

二

土木工學は建築學と共に、洋の東西を問はず、最も古い
技術學である。諸他の技術が大方、工藝技術的なものばか
りであつた時代に既に本格的な技術學であつた。近代的な
精密科學があらばには現れてゐない、一見大づつばな技術
のやうであるが、その寸法、規模が大がかりであり、一工
事の完成に數年乃至十數年を要するものが多いので、その
設計には將來に對する透徹した豫見と共に、慎重な、隠然
たる力學的知識、少なくとも力學的『直感』を必要とする。
(現代の土木學は随分複雑な數學を必要とし、一部の土木
工學者は卓越した數學者であるが、近代以前に於てはさほ
どの精密性は必ずしも要求されなかつた。ただ確實な技術
的直観が必要であり、そしてかかる直観は經驗によつて養

化され、不必要な安全率を節約して合理化、能率化された
と共に、それと關聯する諸他の技術の近代化、複雑化に對
應する近代化、複雑化が行はれたのである。おそらく日本
技術史に於て明治維新といふ最も大きく、最も鮮明な時代
區劃が、案外、それはど鮮明に引かれ得ない部門があると
すれば、それは土木技術に於てであらうと考へられる。

第二に土木技術は最も総合的なその取扱對象だけでな
く、技術そのものが大規模な技術である。治水、灌溉、水
道、築城、軍道、交通等、實に國家的、國土的なスケール
に於て行はれ、その時代の文明全體にゆきわたるを當とす
る。土木工學を英語で『シヴィル・エンジニアリング』と
いふのも道理である。それは古いにせよ、新しいにせよ、
文明の技術、國土の技術、その風格から云つても、特質か
ら云つても『王者』の技術である。だから近代以前に於て
は土木工事に與かつた者は上述第二型に屬する専門技術者
といふよりは、(日本あたりではさういふ専門技術者が少
なかつたせいもあるが)むしろ第一型に屬するその時代の
指導者階級から出た。古代支那に於ける禹の事蹟は有名で
あるが、日本に於ても奈良朝時代に於ては指導者階級に屬

する(例へば行基のやうな)僧侶がそれに當つた。戦國期に於て土木技術に當つた者はいふ迄もなく武士階級であり、徳川期に於ては第三型にして第一型を兼ねてゐたと考へられる儒者階級から出た。例へば野中兼山の如きである。土木技術者はいかゞ特質を具へてゐる。第二型に屬する工學者、技術者にして、しかも第一型の指導者的役割を演じた古市博士が土木工學者であつたことも決して偶然ではないのである。

三

第二にはその時代が考へられる。古市博士は明治初期以來の日本工學界の先達であつた。明治初期は云ふ迄もなく、わが國科學及び技術界の黎明期である。多士僉々ではあつたが、しかし専門の科學者、技術者は足りなかつた。かういふ時に當つて活動した卓越した科學者は、自家専門の科學的研究を進め、深めるといふよりは、一人でも多くの若い科學者技術者を養成、教育しなければならなかつた。科學、技術の行政方面にも多くの力を割かねばならなかつた。従つて當時の科學界、技術界の先達と謂はれる人

博士にさしあたり、辻理之介(後の専大)に於て英語を學んでゐたが、當時大學南校が開校され、貢進生を募るに際し、姫路藩は石本新六(後の陸軍大臣、男爵)と共に博士を推舉した。

かくて明治三年、博士は大學南校の正則普通科の上級に編入された。翌四年正月改正の貢進生名簿によれば、當時の現在數三一〇名、その内、英語を修むる者二一九名、フランス語を修める者七四名、ドイツ語を修める者一九名、そして博士はフランス語組の一人、しかも七四名中の一番であつた。

明治四年十月、大學南校が廢せられ、新たに南校が再開された。博士は再び選抜されてその生徒となつたが、語學は従前通りフランス語を選び、教師マイヨの信愛を受けた。當時、南校生徒で通譯もしくは教師の内職を有つものが多かつたが、博士はマイヨの誠しめにより、かかる内職の招聘に應ぜず、超然、勉學に専心した。

南校は明治五年に至り、第一大學區第一番中學と改稱せられ、更に翌六年、開成學校と改められた。開成學校の學科は、法學、化學、工業學、諸藝學、鑛山學の五科、經役

たちは大部分、研究室に閉ら籠ることができず、主力を教育や行政に注ぎ、自らは第二型に屬する本格的な科學者でありながら、第一型的な仕事に執掌し、そして立派にそれを任されたのである。數學の菊池大篤、物理界の山川健次郎等みな然りである。まして、専門そのものが、謂つて見れば「第一型」的であつた土木工學であつた古市博士の如き、當然さういふ地位に立たされざるを得なかつたのである。

四

古市博士は安政元年閏七月十二日、江戸鵜野町の姫路藩中屋敷に生れた。二歳のとき安政の大震に遭ひ、五歳のとき、祖父孝友が藩の元締役になつたので、大手前の上屋敷に移り、そこで養育された。

文久三年、十歳のとき、一家を擧げて姫路に移つたので、博士は齋翁好古室に出でて勉學に努めたが、慶應元年、再び江戸、上屋敷に歸つた。明治元年、博士、十五歳のとき、藩主酒井侯が、その上屋敷を朝廷に上納し、全藩士、みなこの殿を失つた。博士の一家は日本橋横山町に移つた。

の都合上、専ら英語を以て専攻することとなつたが、フランス語を修めた者には諸藝學科が設けられた。それで博士はこの科に入つた。

十月九日の開業式には明治天皇の行幸を仰いだ。博士は選ばれた八名の優等學生中の一人として、御前に於て酸液中に鋼鐵を燃焼する實驗を天覽に供し奉り、文部省からその賞としてフランス語の辭書一部、數學書三部を授與せられた。

明治八年、文部省は最初の留學生として、東京開成學校(開成學校の校名には、明治七年から「東京」の二字が冠せられた)生徒から十一名を選抜したが、博士はその中の一人で、フランス留學を命ぜられた。

博士は教師マイヨの勧めに従ひ、パリの工業大學、エコール・サントラルに入學するため、まづその豫備科であるエコール・モンジュに入學し、明治九年、そこを卒業すると同時に、エコール・サントラルの嚴密な競争試験を受け、見事三番の好成绩を以て入學した。

明治十二年、博士は同校三ヶ年の課程を卒へたが、第二位の優秀な成績であつた。それでコック・ブルフ製造會社

の如きは多額の俸給の他に、利益の歩合を付けるといふ條件で博士を傭請しようとしたが、博士は、自分が日本政府の官費留學生であると云つてその懇望を辭して受けず、更に一年の留學延期を請ひ、ソルボンヌ大學の理科に入り、數學及び天文學を修め、翌十三年卒業し、同年歸朝した。二十七歳であつた。

その頃の日本留學生は政府から一年の學費を四回に分けて貰つてゐたが、これを受取ると同時に旅宿の主婦に預け、月末毎に勘定せしめた。フランス人の學生は勘定書を見ては、とかく雜辭をつけ、主婦を困らせたのであるが、日本留學生は、その勘定書にいささかの疑念をも抑まず、却つて脱漏がないかを注意する位であつたので、その信用は絶大なものであつた。特に博士は、かういふ點で信用が最も厚かつたと云はれてゐる。かくて博士は自分個人の學業の優秀と生活の端嚴さを以て、日本人の優秀と端嚴さを、フランス人に知らしめたのである。

五

明治十三年十月歸朝、同年十二月、内務省土木局長を命

與した。

ついで明治二十一年、内務卿山縣有朋公がヨーロッパ諸國を巡回するに當り、博士はその隨行を命ぜられた。博士はその流暢なフランス語を以て公の爲に多くの便宜を計つた他、帝國大學及び東京市區改正委員會から囑託された任務を果した。

明治二十三年、内務省土木局長となり、大學の方は兼務となつた。大學では既に述べたやうに、當時その方面の權威であり、また既に述べたやうに大學行政に異常な苦心があつたのであるが、何しろ未だ三十歳そこそこの元氣な若い學長であつた。その當時、隅田川に於ける大學のボートレースといへば、最も華やかな東都年中行事の一つであつたが、明治二十年、第一回の法、醫、工三分科の競漕では工科が敗れたので、翌二十一年のレースに學長としての博士の力の入れ方は非常なものであつた。初め幼い干息を連れて艇庫の上で觀てゐたが、工科のボートが言問の彎曲點のところまで他艇を抜くと見ると、干息を傍人に托し、我を忘れて艇庫を馳せ下り、双手を擧げて吹ひ、跳り、艇員の登岸を迎へて即座にシャンペンを抜いた。當時の學生は未

ぜられたが初任給月俸百二十圓であつた。當時の百二十圓といへば今日の千二百圓にも當る。實に異數の優遇で、留學の羨むところとなつたのは無理もないことであつた。翌年、文部省御用掛を兼ね、東京大學理學部に數學を講じた。

明治十五年、河川、港灣修築の仕事が漸く繁忙を加へて來たので、文部省の兼務を辭し、専ら土木局の直轄工事を監督することとなつた。十七年、内務技師となり、新潟縣在勤となつた。又この年、結婚した。信濃川を始め、同地方直轄河川の改修と、北陸諸縣に於ける地方土木工事の指導、監督に當つた。居ること一年半、明治十九年、帝國大學工科大学教授兼工科大学長となり、東京大學醫藥學部と工科大学とが合併したばかりの工科大学に於て、困難な教育行政に當ることとなつた。同時に内務技師を兼ね、本省土木局勤務となつた。大學に於ては河川、運河及び港灣工事を講義し、また新設工科大学最初の學長として學内の統制、學科の監理その他に盡力し、他方内務技師としては、從來オランダ人工師の手に委せてあつた土木事業の設計及び監督を本邦人の手に移し、土木行政の種々なる重要に當

だシャンペンを知らず、思はず

「何んて、うめいらムネだらう！」

と云つたといふ一つの話が殘つてゐる。それから博士が先頭に立ち、學生は隊を組み、旗を押し立て、兩國中村樓の祝捷會に練り込んだと云ふ。全く當時でさへ、遙に見る景観であつたといふが、今では、もう夢に見ることもできない風爽たる風景であり、時代であつたのである。

明治二十三年には勅選議員となつた。明治二十七年には土木技師となり、依然大學の方は工科大学長であつたが、三十年、大學の方は後進に道を開く意味で辭意を示した。當時の總長濱尾新が極力それを慰留した。或る日、夕方から濱尾總長がその慰留の爲に博士宅を訪問した。總長も有名なねばり屋である。博士は夕飯を出しては總長の尻が長くなると思ひ、態と夕飯を出さずに頑張つた。總長も負けず、その夜、夜半まで相對峙して下らなかつたといふ挿話がある。つひに翌三十一年、大學の方は菊地大鑑男が總長となるに及んで辭意が叶へられたが、同時に内務省の土木技師兼土木局長をも辭してしまつた。

しかし時代と學問とは、博士をその儘にしておかなかつ

た。その年の十一月には逓信次官に任ぜられた。しかし、それも三十三年には退いた。

明治三十六年、再び起用されて鐵道作業局長官に任じ、本邦官設鐵道經營の任に當つたが、とき、日露の風雲急を告ぐるに至り、京釜鐵道建設の急を要するところから、京釜鐵道株式會社總裁を被仰付、轉じて朝鮮に活躍、至誠を獻げて國家の重大時局にあたり、晝夜兼行の努力と、絶大なる手腕と、高潔なる人格とに依り、日韓兩國政府の信任と、京釜鐵道社員の家望を得て、僅か一年にしてその速成建設工事を遂行したことは、博士の第一型の人物として、統率、組織の力の非凡なることを示したものであつた。やがて統監府鐵道管理局局長官に任ぜられ、京釜鐵道全線の買収、引継を了へた後、決して辭した。明治四十年である。

六

かくて博士の官界の生活は一度終りを告げたのであるが、長く貴族院議員たり、大正八年には勳功により特に男爵を授けられ、大正十三年には樞密顧問官に親任され、その公人としての多忙な生活は生半端いたのである。

次にその事蹟の大要を見やう。

まづ學界への貢獻を述べると、明治二十一年には本邦最初の工學博士となり、明治三十九年、勅旨を以て帝國學士院會員に列し、明治四十二年その第二部部長となり大正十年に及んだ。日本工學會は明治十二年の創立で、工部大學最初の出身者に依つて發起されたものであつた。わが國工業に關する學會の濫觴であり、學界全體から云つても東京生物學會に次いで最も古いものである。博士は明治二十年に入會、翌二十一年幹事となり、明治三十三年には副會長となり大正六年會長となつた。明治二十四年、濃尾大地震を契機として翌二十五年に設立された震災豫防調査會には、他の理學及び工學の専門學者と共にその委員に任命された。大正十二年の關東大震災の結果、震災豫備調査會は解散せられ、大正十四年、震災豫防評議會が地震研究所と共に設立されると、引續いてその評議員の一人となり、逝去まで前後四十餘年間、本邦の震災豫防の爲に深甚の注意を怠らず、擔當委員を獎勵、鼓舞したことは特筆に値する。樞密顧問官に親任せられ他の一切の關係を辭したに拘らず、一勅任官を會長とする評議會の一評議員たるに甘ん

じ、評議員會には必ず出席し、八十歳の高齡に達するも尚ほ止めなかつたことは敬慕に堪えない。また大正九年、學術研究會議官制が公布せられ、科學及びその應用に關し、内外に於ける研究の聯絡並びに統一を圖り、その研究を促進、奨勵することになると、博士はその會長に選ばれた。また大正五年、時代の要求に應じて財團法人理化學研究所の設立を見ると共に、その創立者の一人として盡力した博士がその初代所長に任ぜられた。それから昭和四年、東京に開催された萬國工業會議及び世界動力會議東京部會に

は、總裁秩父宮殿下の下にいずれも會長として、數名の外國參加會員を招集し、それぞれの専門部門の研究に於て國際的討議を行はしめ、工學の國際的進歩に貢獻したのみならず、斯界の研究に於てわが日本の占める地位を重からしめたことも誠に感謝すべき貢獻であつた。

その専門の土木技術者としての國家的貢獻はもとより博士の本領である。土木技師、技監、局長として活躍した時代は勿論、その後に於ても河川、港灣、鐵道、水力電氣、上水道、製鐵、鑛山等の各方面に涉り、博士の設計、調査、

劃策、統率、監督、意見提出等の方法で關與しないものは殆ど無かつたと云つても過言でない。それらはいずれも産業及び國防上、國家百年の大計の基礎となつた、眞に國土的性質を帯びたものばかりであつた。

博士は元來強健で、病臥することは稀であり、七十代の高齡に及んでも内外多端の公事に忙しかつたのであるが、昭和九年一月の寒氣に堪えず、動脈硬化症に心臟性喘息を併發し、遂に一月二十八日、八十一歳を以て逝いた。